

## 令和5年度第2学期始業式式辞

おはようございます。

穎明館生の皆さんにとっての夏休みはどうでしたか。勉強とともに、文化祭の準備やクラブ活動に励みましたか。読書しましたか。1学期終業式の式辞でチャット GPT の話をしたので、私が今日も使っているのかなと思っていますか。今のところ私は、時間が少々かかっても、自分の頭で考え、自分の言葉で皆さんに伝えたいと考えています。

さて、2学期は文化祭や学校説明会・見学会などで来校者・お客様を多くお迎えします。そこで今日は改めて、穎明館の魅力について考えたいと思います。私は立場上、学校説明会などで、受験生や保護者に穎明館の魅力について語る機会が多いものです。このように話しています。少し紹介します。

本校・穎明館の教育目標は「国際社会で羽ばたく真のリーダーの育成」です。グローバル、そしてサステナブルを意識して、リーダーシップのとれる人になってほしいと考えています。生徒には日頃から「リーダーとは尽くす人だ。誰もがリーダーになり得る」と伝えていきます。世のため人のために自分がどういった貢献ができるか、を考えさせ、実行させたい。EMK（経験・道徳・知識）はリーダー育成のための大切な指針です。

授業はもちろん、宿泊体験学習、生徒が自主的に取り組む文化祭や体育祭などの学校行事やクラブ活動などにおいても主体性、協働性を育てています。そして、勉強と部活動や学校行事の両立実現を通じて、非認知的能力、グリット（やり抜く力）も身につけてほしいとも願っております。

私は、とある塾の先生から言われた言葉が忘れられません。「穎明館に行った教え子たちは、皆、しばらくして、高校生くらいになると、塾に来ては自分の将来の目標を語ってくれる。偏差値や大学の名前で子供たちを輪切りにしていない。そこがいい」。進学校として当然、大学合格実績へのこだわりはあります。しかし数字もさることながら、我々が、進学校として大事にしているものは、子供たちの希望です。中学高校の6年間、この緑豊かな教育環境、充実した教育施設の下で、いきいきと、のびのびと自分自身を見つめ、どれだけ社会や未来が不透明で厳しくても、自分自身の軸を大切に、将来・これからを決めていってほしいという教育を行ってきています。すなわち、穎明館の完全中高6年一貫教育で育てたい生徒像は、自分自身と向き合い、将来のビジョンを考え、興味のある、やりがいのある分野で、最大限の社会貢献をしていこうとする生徒です。我々、穎明館の教職員は、そのような願いを持ちながら一人ひとりの生徒に寄り添い、温かく見守っています。

どうでしょうか。穎明館の魅力の一端は伝わったでしょうか。

とくに、「我々が、進学校として大事にしてきているものは、子供たちの希望です。中学高校の6年間、この緑豊かな教育環境、充実した教育施設の下で、いきいきと、のびのびと自分自身を見つめ、どれだけ社会や未来が不透明で厳しくても、自分自身の軸を大切に、将来・これからを決めていってほしいという教育を行ってきています」のくだりは、私がいつも強調しているところです。在校生の皆さんも、そして今までの多くの卒業生も、この言葉通りに有意義な6年間を過ごしているものと信じています。

ただ、いつも自信を持って話しながらも、少し胸につかえていることがあります。それは「夢や希望をもちなさい。やりたいことを見つけなさい。やりたい仕事につきなさい」と言われて、かえってプレッシャーに感じたり、悩んだり、困ったりしている生徒はいないか、ということです。「焦らなくていい、じっくり時間をかけて考えなさい」と言われても、進路選択の期日は確実にあります。確かに人生は選択の連続です。それでも実は好きなこと、興味のあることが見つからない、「好きにしていよいよ」と言われるたびに追い立てられるような感覚の中学生や高校生もいるのではないかと。自分軸で考えることに疲れている生徒、進路選択への焦りや不安を覚える生徒、そんな生徒たちを励ます言葉や適切な助言はないか。

19世紀から20世紀にかけて、イギリスにアルフレッド＝マーシャルという経済学者がいました。ケインズの師匠でもあるケンブリッジ大学の教授ですが、その就任演説に有名な一節があります。“cool heads, warm heart” 「経済学を学ぶものは“cool heads, warm heart”を持たなければならない」。

マーシャルはロンドンの貧民の研究をしていたそうです。貧民街に住むような人々の辛さを減らしたい、なくしたいという warm heart で経済学の研究を続けたのでしょう。現在でも貧困や格差の問題は深刻ですが、現実的に解決していくためには、データを集めて、分析し、適切な政策を実現する、すなわち cool heads、冷静な頭脳が必要です。熱い思いと冷静な頭脳、この2つは経済学に限らず、学問に向き合う基本的な資質として求められるものだと考えます。

マーシャルは困っている貧民、社会問題としての貧困から経済学に向かいました。世の中には困っている人がいて、多くの問題点がありますね。将来が見えてこないときは、社会問題に焦点を当ててみて下さい。自分の進路を考える時、自分軸からのアプローチだけでなく、社会の様々な問題点からのアプローチがあることも知っておいてほしいと思います。

ところで、皆さんは JICA という国際機関を知っていますか。JICA（国際協力機構）は、開発途上国への国際協力を行う組織、日本の ODA（政府開発援助）の実施機関です。世界中で困っている人や国の力になろうという、高い志をもった人たちに支えられています。職員採用は大変狭き門です。7月に行われたキャリアガイダンスでは、ご勤務されている、本校の保護者の方が、その内容を丁寧に説明してくださいました。その時に、私は以前、送り出した学年で、偶然に3人も JICA に勤めているという話を聞いて、感激したことを思い出しました。穎明館在学中は目立たない、普通の生徒たちでした。きっと世界的な問題に向き合い、考えを深めて、JICA への進路を選んだのだと思います。そこにあったのはきっと、“cool heads, warm heart” に違いありません。

今日は2学期の始まりにあたり、文化祭や学校説明会などで、多くの来校者・お客様をお迎えすることをふまえて、私の伝えている穎明館の魅力、そしてそこから私の進路選択の視点を少々、話しました。ただ実際のところ、来校者は何を見ているのか。穎明館生皆さん、一人一人を見ているのです。校長はああ言っているけど、生徒は本当に学校生活楽しいのかな、いきいきと送っているのかな、後輩の面倒は見てくれるのかな、といったところです。皆さん自身のことを振り返ってみてください。文化祭の展示場所で優しくしてもらえたとか、クラブの先輩が楽しそうに説明してくれたとか、出会いの場面がありませんでしたか。未来の穎明館生、よりよき後輩を迎えるためにも、照れずに気持ちのいい挨拶や、優しく丁寧な対応を忘れずに心がけてください。そして、来校者に「穎明館のよさ、魅力はどこにありますか？」と尋ねられたら、率直に答えられる生徒であってほしい。いつでも「穎明館こそわが誇り」と思えるように、勉強に、学校行事に、クラブ活動に全力で取り組んでいってください。

6年生、37期生の皆さん、「穎明館の魅力は？」の質問にどう答えますか。きっと、「進路決定にとことんつき合う伴走者のような先生方がいることです」と答える人も多いことでしょう。実りの秋から冬の本番に向けて、自分とともに伴走している先生方を信じて、着実に進んでください。

穎明館生の皆さん、2学期、まだまだ暑い日が続きます。健康管理に十分留意し、充実した日々を送っていきましょう。

以上、令和5年度第2学期始業式式辞といたします。